町史とっておきの話 278

いま残しておきたい只見とっておきの話 ⑤

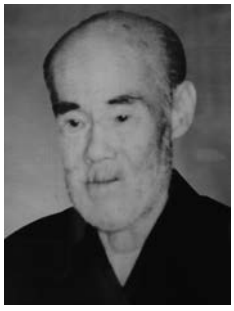
―河井継之助を守り継いだ矢沢家の人々―

只見町文化財調査委員会議長
飯塚　恒夫

塩沢の河井継之助記念館には、河井継之助が息をひきとった終焉の間が当時のまま残されています。慶応四年（一八六八）八月十二日、継之助は只見から若松に向かって出発、途中塩沢の医師矢沢宗益宅に投宿します。重症の身で若松へ発つことがかなわず、八月十六日矢沢家の一室で生涯を閉じました。

この当時の矢沢家の家族状況を見てみると、医師宗益（六五歳）と妻キサ（五二歳）は健在ですが、長男の宗順（医師）の存在は不明で、死亡しているとも考えられます。宗順の長男宗篤（一七歳）は医師の修行中で、ここに宗益の次男新角（三八歳）が同居しており四人家族だったようです。新角は宗篤が若いため、その後見役であったと思われます。『明治備忘録』（塩沢・岩渕家文書）に、「御家老河井継之助殿手負ニテ当地山崎矢沢新角方御滞在中死亡セラル」とあります。この記述から宗益が隠居の身であり、新角は戸主役の立場で、長岡藩の大殿牧野忠恭の休憩の折や継之助滞在中における諸々の対応にあたっていたことが伺われます。

その後、宗篤は祖父宗益・父宗順の跡を継ぎ、馬場順誠（旧南郷村下山）や佐藤寛斎（長岡藩）に医術を学び医師として地域に貢献しています。長女アサイに金山町滝沢から渡部久吾を養子に迎え、その長男が伊織であり、さらにその長男が大二となります。


▲河井継之助終焉の家の保存に尽力した矢沢伊織

大正六年は、河井継之助の五十年忌に当たります。それを記念して宗篤は河井継之助の建碑を計画、大正四年十二月、自ら発起人となって運動をはじめます。しかしこの計画は実現することなく、宗篤は昭和十一年十月に亡くなります。宗篤の思いは、久吾と伊織親子に引き継がれ、昭和十二年の継之助七十年忌の記念事業として、矢沢家の庭に「河井継之助君終焉之地」の碑が建立され、盛大な除幕式が行われました。

昭和三十七年、滝ダム建設によって、塩沢集落のほとんどが水没対象となりました。その時の当主であった伊織が、宗益以来四代にわたって守ってきた「河井継之助終焉の家」を自分の代でなくしては先祖に申し訳ないという気持ちが強かったと語られたのを筆者は記憶しています。伊織は記念碑とともに家屋全部を移転保存するための補償を、電源開発株式会社に再三にわたって求めましたが、家屋の歴史的な価値は認められませんでした。結局、記念碑のみを補償対象とし、矢沢家の所有物としては認められず、町が補償の当事者となって記念碑の移転がすすめられたのです。伊織は止むなく全家屋の移転を諦め、終焉の間のみを切り離して、移転先の新築住宅に接続させて移築保存したのです。その後、伊織の長男大二が跡を継ぎ、終焉の間に継之助関係の収集品や医師の道具類を展示し一般に公開していました。

町では昭和四十一年、矢沢家に隣接する高台に土地を造成し、記念碑を移転して小さな記念館を建てますが、準備に時間を要し、昭和四十七年にようやく「河井記念館」がオープンしました。しかし「終焉の間」は矢沢家にあり、見学者にとっては不便な状態でした。平成三年、矢沢家の好意により、土地家屋の一切が町に移管されて、平成五年に現在の「河井継之助記念館」が建設されます。もとの記念館は「山塩記念館」となり、二つの歴史観光施設ができあがったのです。

▲水没前の矢沢家

只見川電源開発当時、伊織氏の熱意と英断がなければ、終焉の家は残っておらず、湖底に沈む運命でした。現在の河井継之助記念館が只見町にあるのは、矢沢家が五代にわたって守り受け継いできた熱い思いがあったからこそといえます。